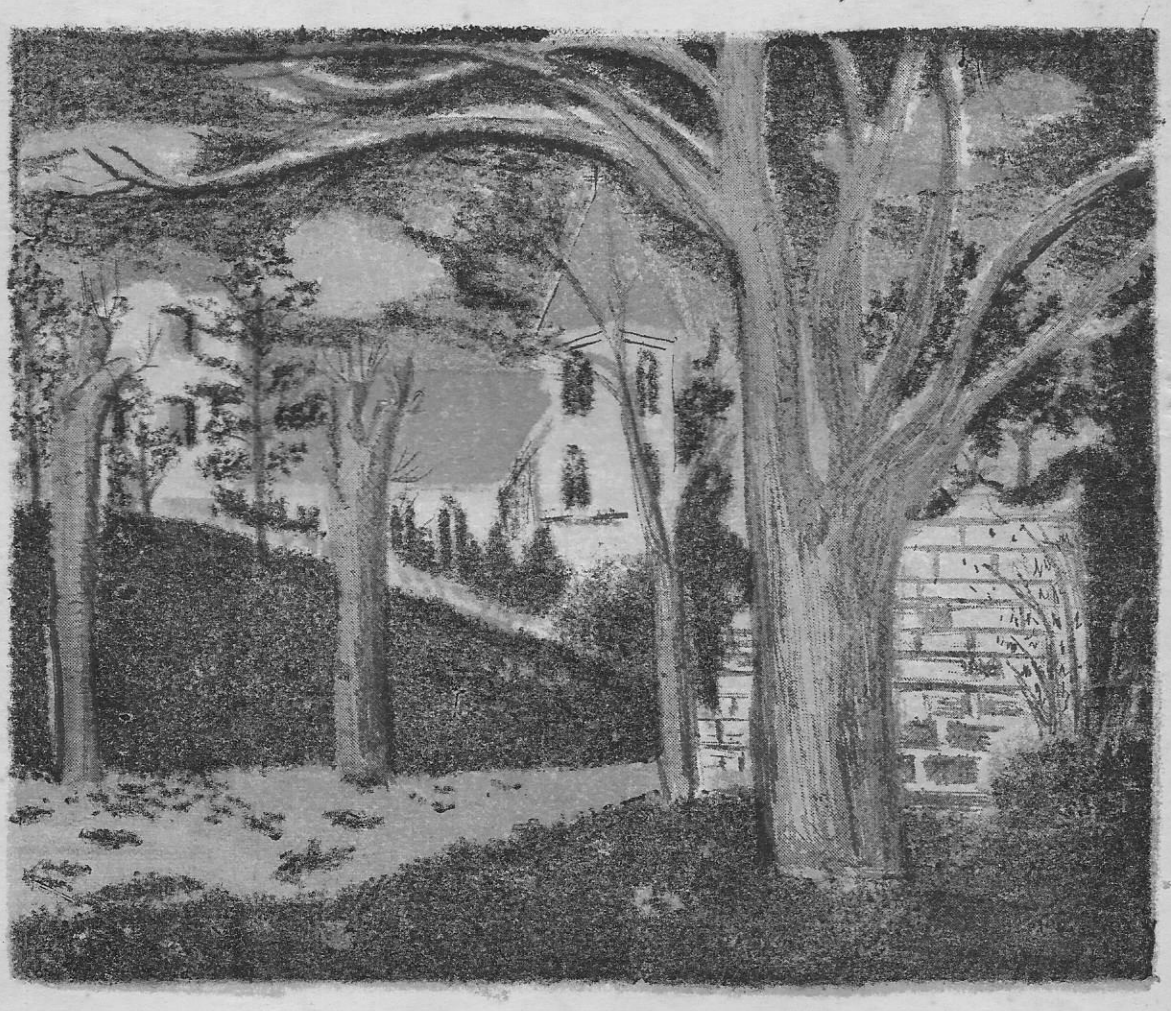
LEON-TODO

N-ro 3



1954 MAJO-JUNIO

kun adresaro

ENHAVO

El la taglibro dum Marveturado al Ameriko ..... T. TAKAHASI

Ridindajo —Fablo— ..... N. HAJKAŬA

Esperanto 60 jara ..... tradukita de-N. ASAHIGA

LETERO EL ĈEHA KAMARADO ..... A. HOŜIDA

Mozart kaj Beethoven ..... HANAZONO-BONTARŌ

Mia Vivo kaj Penso Lastatempa ..... Hoŝida-Acuŝi

Saluto el Suda Hokkaido ..... Acuŝi Hoŝida

INFORMILO

OTARU ESP.-ASOCIEO —MEMBROLISTO

JUNI ESP.-SOCIETO —MEMBROLISTO

ENSPEZO kaj ELSPEZO dum 1953 de O.E.A

POSTSKRIBO

アメリカ航海の日記から

高橋達治

ロスアンジエルス

海亀がのっそり海面に浮び上っていたり、鮫が船の側をうろうろとたわむれていたり、海豚が船底をくぐったりするのに新奇な「喜び」という程の感情さえもちながら航海したカリフオルニアに沿うおだやかな海での航海も、もう終りをつげてしまった。明日は再びロスアンゼルスに着くのだなと思うと、かんだるい航海の気分からさっと爽やかな風が船室から入ってくるのをまともに身に受けているような心地よさも感ずる。まづいダンヒルのキングサイズ煙草をもみ消して最后の米国寄港地のプランを考えてみるのだが、やはり、いづれにしても私が頼っているのは S-ro C.Chomette だ。あの人の guido に従って僅かな上陸時間を十分に利用しなければならない。エスペランチストにしばらく会えなかった南アメリカの航海の後では念のためにと独言エスペラントをしやべる練習もやってみなければならない ——

（1953年1月31日）

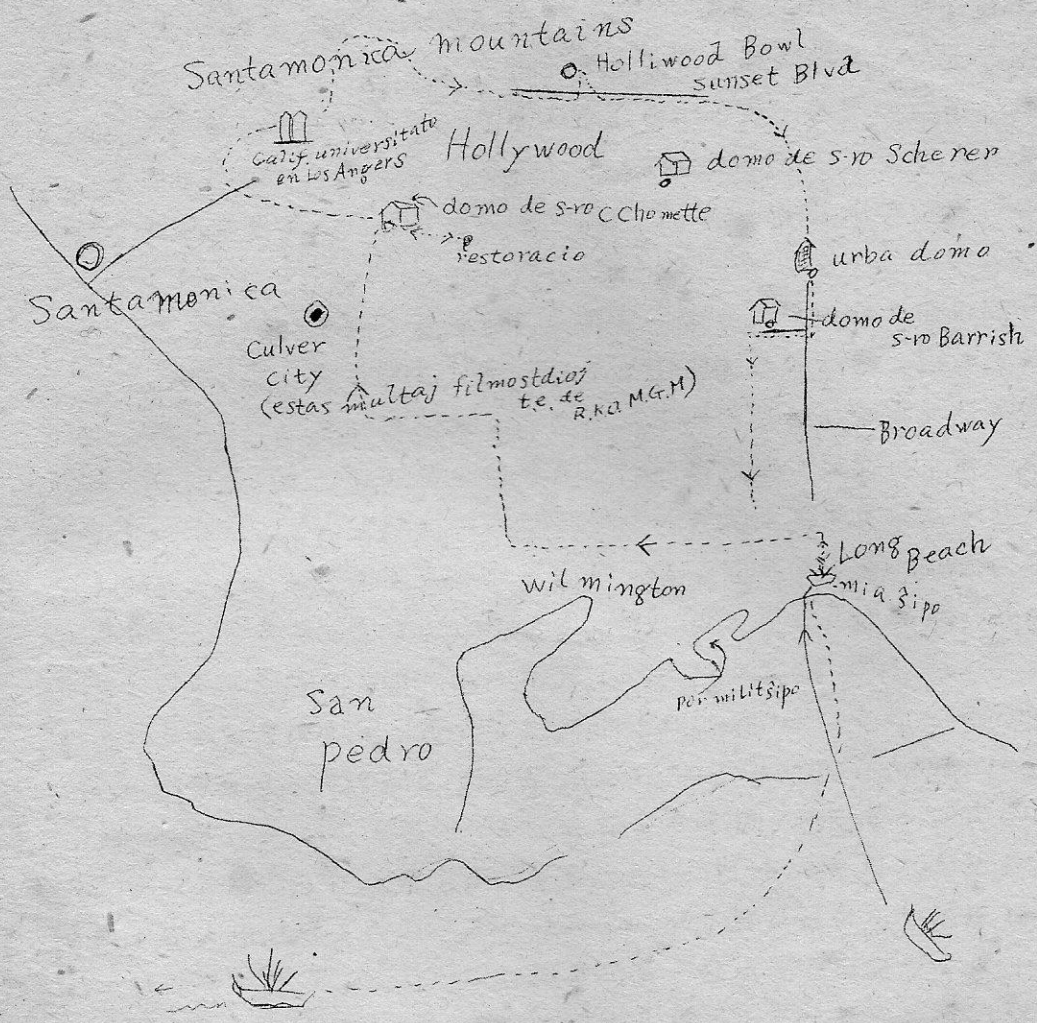
例によって私の入港配置であるフオクスル（la plej antaŭa parto de ŝipo）に立ち、石積の防波堤を再びロング・ビーチにと入っていった。

日曜日 —— 遊戯場や、船貸場（機動小漁船）のあるこの辺には日曜の行楽をたのしむ人が、そこの突堤を一杯にうづめている。—— 彼等の乗って来た自動車のおびただしい群をみて驚いたり、遊覧飛行船をふりあおいで見たりしながらも、私はセーラー達と私の部署につとめていた。いよいよ岩壁が近いらしい。ホーサー（大きな繋留用ロープ）をたぐり出す仕事を手伝っていた私の肩をセーラーの一

人がたたいた。「高橋さん、来ていますよ！」何が？と問いかけるような気持で体を起し、岩壁を見た。あと百米。見ると、その岩壁の上に、私の方を見て手を振っている夫人。口に手をあてて何やらどなっている旦那さんがある。まぎれもない、Chomette さん夫妻だ。驚いて私も手をあげた。嬉しいというより驚いた方が先である。とても、もうセーラーの仕事など手伝っている気持にはなれなかった。急いで舷門のところにいった。岩壁まであと 20m。そこで s-ro が近づく船と一緒に私を入れてカメラのシャッターをきられたようだ。岸壁到着。梯梯を下りて ges-roj と握手したとき、私は何ともいいようのない安堵した気分になれた。前回でのように一人でこのだだっ広い街をさまよう必要はなくなったからだ。倉庫の後に例の verda stelo のついた車があり、s-ro は車から雑誌やら土産物やらを、三人でやっと持てる位 donaci してくれた。Fundamento Krestomatio なども二冊あったから一冊あげるといって差し出された。出港時間がわかるまで又船の中をみてもらった。お晝の用意がしてあってそれが純和食（赤飯）であったから、そんなものをみて貰ったりした。

出港は夜半ときまった。それで私も ges-roj の、市内見物をさせてあげるという御好意をゆっくりした気持で受けることができるわけである。

私が自動車に入ると、すぐに s-ino の運転で車が動きはじめる。私と s-ino が運転席、s-ro が後の席。面映い気持もしたが、運転席から現れてくるこの広い街の風景を眺めてゆくのは何という心地よさであったことか。Wilmington の漁港が左に見える辺り急に車が右にカーブして自動車は私の前に広大な舗装道路と広々とした野原をみせてくれた。そのアスファルト道路に人影を拾うことはできない。時に行過うのはすべて新型の乗用車である。Se oni povas diri Novjorkon kiel "urbo de alteco aŭ tri dimensio", ankaŭ oni povas diri ĉi tiun urbon kiel "urbo de vasteco" といったら、Jes, Los Angeles estas la plej vasta



urbo en Usono. といっておられた。ついでに、Sur stato en mia lando ni povas vidi nur amataj homoj, sed nur aŭtomobilojn en tiu ĉi strato. といったらにこにこ笑われた。しかし風情ないものである。人影一つ見えない広い道路などというものは。左に曲る。そうして私達の右手に数十の飛行機が並んでいる平地がある。その金網の奥を指されたs-roが、Aerhaveno de Los Angeles! De tie ĉi, s-ro Mijamoto revenis al via lando. 神戸の宮本さんがここから別れて行かれたということである。私もこの街でゆっくりして飛行機で颯爽と帰りたい

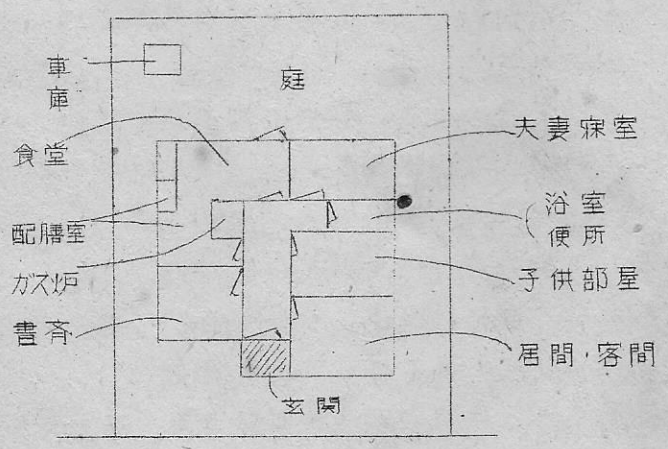
ものだが――などと思ってみたりする。右に曲る。小高い丘を越えてサンタモニカの海が青く美しく見えた。そうして道路が起伏し、その道路の両側に新しい小住宅の群が、陽気な色合に塗られて、沢山あった。もう Culver City であろうか。家々の間にぎらぎらと緑の美しい小公園があって、そこの遊戯場に大人も子供もまじりあって遊んでいる。

柵のめぐらしてある中では数人の男と女の青年が Cowboy の姿よろしく、馬に乗って愉快そうだ。(MGM や RKO の studio でのふん装だろうか)やがて Los Angeles の街らしくなった。住宅が密集し、道路が白く美しい。もう私の家は近いよ、と s-ro がいわれる。自動車がとまる。家に帰る前に tagmanĝo をとりませうと s-ino がいわれた。そこの道路傍に Casa de ―と大きくかかれた看板があったから Kion signifas "Casa"? と訊ねたら domo だそうである。スペインの restracio だそうである。Ĉu vi ŝatas hispanan manĝaĝon と尋ねられたが遠慮して、ordinaran tagmanĝon ; mi ŝatas kiujn ajn vi ŝatas. と答えた。しばらく自動車をはしらせ、とある大きな restoracio に入った。ロスの restoracio は東部のそれと大分異っている。グロッサリー(食料品店)みたいに駅の改札口のような出入口があって、おまけにそこで入場人員を制限している。こんな不愛想な店は下級な大衆食堂だろうと思ってみるのだが、大入満員で順番を待っている人達の衣裳は立派だし、番號札を渡して、順番に入場させている guide girl は貴婦人みたいに上品で美しい。他の男達が帽子をとっているから私もとらなければならないなどと感じさせる位の雰囲気があった。しばらくして入場。着席するとすぐ Ĉino の kerlo が manĝaĵo を持ってきてくれた。カステラ、ケーキ、水ヨーカンのケーキ。それが生の茶っ葉の上にのっかっている。此とコーヒー。なるほど ordinara manĝaĵo だなと思った。菓子をたべ終ったら ges-roj がその茶っ葉を生のまゝ食べはじめた。実に野蛮である。しかし真似をしないわけにゆかないから私もたべた。

案外美味いので二度びっくりした。本場の洋食は生野菜をたべるのだから、今度日本へ帰ったら生キャベツでも生人参でもどんどん食べてやろうと思ったが、どうもこの菜っ葉は普通の菜っ葉とは違うようだ。

自動車で前の道に戻り、まもなく mia domo! という S-ro の声に応じて下車した。しゃれた家である。すぐテレビーのおいてある居間に通された。突然けたたましい犬の吠え声が奥から聞えたと見る間に一匹の小犬が、必死の形相で私にかみつかんばかりの態勢で私の足下を襲った。なるほど私はここの家族とは毛の色も皮膚の色も違うから。しっ しっ などいっても駄目. S-ro と調子を合はせて foriru! とどなったが 尚更けたたましく吠えた。S-ino が犬の首をおさえて、なおも鼻の頭にしわをよせてかみつこうとする犬をだいて奥につれてゆかれた。S-ro Scherer を電話に呼んで頂いたが、今日は忙しいので君に会えないので残念だといわれた。お借りした "Ĉirkaŭ mondo" を s-ro Chomette にお返しするから、と禮をのべた。

S-ro Scherer 同様 s-ro Chomette も家の中を案内して下さった。参考までに下にその配置を記してみよう。大体ロス附近の家はこの様な配置であるらしいから。



居間の隣が書斎。調度が古めかしく落着いた感じである。子供部屋に 2 filinoj の寝台がある。姉さんの f-ino Diant は近い中に結婚される由。浴室と便所は同室。banejo

にまでラヂオが据えられてある。ges-roj の寝室にはザメンホフの写真と胸像がおかれてあり何よりも目につく。ダブルベッド。その隣り庭に面して食堂。明るい。台所はすべてガス装置。この街の燃料は殆んどガスが使われているらしい。ガス炉がこの家の中央にあり、そこで空気煖房、冷房をやるが、一日の温度較差がはげしい（晝暖く、夜寒い）のを、戸内で aŭtomatike に調節するのだそうである。ガスレンヂは極めて鋭敏にできている。裏庭の芝生は手入がゆきとどいていた。そこで s-ino が s-ro と私とを記念にカメラにおさめてくれた。庭の隅に犬小屋があり、domo de amiko とかかれてある。この malamika hundo が"Amiko"という名を頂戴しているんですか、と聞いたら笑っておられた。（Amiko は私がロスをはなれて間もなく自動車にはねられて死んだそうである。）

居間に帰る。居間の書棚にもかなり多くのエスペラント図書があった。昭和初年、ロス市を訪れた日本人 S-ro S—(?) の世界漫遊記を示してその中に s-ro の記事がかかってあったのを s-ro がさしめして読んでくれといった。S-ro S-の s-ro と s-ro の frato との交友についてかかれてあった。s-ro が Francujo からの移民であることがわかったので"Je pent parler Français un peau"といったら、S-ro Takahasi povas paroli francan lingvon. といって s-ino の肩をたたかれた。s-ro が無邪気ですぐはしやいだりして感情を表面に出されるのに Finlando からの移民である s-ino はぢつくり落着いて居られる。日本人御夫婦と反対で何だかおかしかった。"もう時間がないですよ"と s-ro にささやかれたようである。

楽しい居心地よいこの家から再び陽光のまぶしい戸外へ出る。西へ。直向にガラスをとおして運転台にふりそそぐ亜熱帯地の太陽光線が私の頬に痛い程てりつけた。日本ならば冬の最中というのに、この街では独特の街路樹である棕櫚のすばらしい並木がぎらぎらと金色に近い緑色をかがやかせている。道路傍の花苑にサボテンやそれに類した植物も植えられていて、南国的である。その辺りで、s-ro

が"これがDiantoの結婚することになっている教会ですよ"といわれs-roもしばらく車をとめられる。中にはいってはみないが、新しい感じのよさそうな教会だった。更に西へ。陽の傾きと共に緑はますます美しくあたりを彩る。そして今度は北へ。20世紀フォックススタヂオの異様なメキシコ風の家があった。カリフオルニヤ大学はその広さにおいて、日本のいかなる大学も及ばないであろう。その周囲をぐるりと一周したが緑色の間にオレンヂ色に塗られた校舎が美しかった。北へ。サンタモニカの山の中に入ってゆく。ロスの別荘地帯であろう。やゝ急傾斜の道路のそばには赤や紫や黄や、様々の小さい花々がやはり一面の緑色と対照して強い色調の美しさをみせている。やがてカーブ。こんどはそのまゝ下り道。崖のそばの家の屋根越しにロスアンヂエルスの街は広々と横たわっている。高い所から展望したロスの街は「緑の街」という名に値する。Tre bela! kaj ŝajnas al mi ke la urbo similas al Kamakura en mia lando. といってs-roを喜こばせてから、内心—いや似ているのはこの坂の感じだけかな—などと思ってみたりする。再び街路に入る。道路標にSunset Blvd.(サンセット大通り)と書いであったので、スウオンスンの「サンセット大通り」という名の映画を見ました、といったら「彼女はmalnova aktorinoだが、私の娘達も先日日本の『羅生門』を見たそうだが大変面白いといっていましたよ」といわれる。『羅生門』の人気をこんなところで聞いてすっかり愉快になった。左に曲り、二つの丘の間の広い道路をひたはしりに走る。自動車がとまって「おりてごらん」といわれた所は公園らしい静かな所である。

「Holliwood Bowl, つまりこの国で一番大きい野外劇場ですよ」と今度はs-inoが説明される。「この間支那のs-ino—が聞てとても上手にここで講演しました。」とs-roがつけ加える。"Ĉu s-ino ----?"と問い返したら、支那の元首のedzinoだという。なるほど宋美齢の事だな、と思った。(支那人名なども英語又は原語で並べる必要がある)青くたそがれかけた大空の下、がらんとした円い太

舞台、そうして何万ともしれぬ座席。星のきらめく夏の夕べ、ここに幾百の燭をかかげた演奏会は――などとその壮観を思わずにはいられない。しかし、今夜も、冬の間は殆んどここは使われないそうである。この附近には"Motel"とかかれたネオンの看板が二、三ある。Motor-Hotel 即ち、自動車ごとにとまる宿屋だそうである。Motel などという新語もかなり米国には多いのではあるまいか。再び Sunset Blvd に帰る。すぐそこにかなり賑やかな街路がある。イスデスト派教会のめずらしい造りなども見せてもらったが、劇場「Chinese」が何といってもその附近の名物だろう。支那風の赤と緑で彩色された大きな建物で、そこの入口は殊の外人が沢山いる。そうしてその人々は皆下をみてにやにやしている。車に揺られ通しでふらふらした足どりの私がそこにゆくと s-ro が Jen! といって指をさされる。コンクリートの上に、これは又、たくさんの足と手の跡、とんでもない落書がべたべたと刻まれていて、それに聞き覚えのある俳優達のサインがしてある。女優の手の跡に自分の手をあててよろこんでいる男もいた。(女優の手でも僕のよりは大きそうだったが、ふざけたまねはやらなかった。) ゲーリークーパーの大きな手もあったし、心臓形に矢をさして my love! とものしたグロリヤ・スウォンスンの落書もあった。

賑やかなハリウッドの繁華街を南に走る。この街の女性のスタイルが美しく感ぜられたので"ロスの女の人はアメリカ中で一番美しいですね"と(一般論的)なお世辞をのべたら、「ほーお前、ロスの女性はきれいだってよ、無論私の妻を含めてでせう一」と上気嫌の s-ro が s-ino を見ながらいわれる。「無論ですよ」。s-ino はどうやら苦笑いをされたようだ。でも s-ino は真直ぐ前の方を見て運転に怠りない。時々 s-ro と s-ino が早口にエスペラントでしやべられるのだが、もうこの辺では一日のハイヤー乗車で疲れてしまった私には、その会話の話題さえわからなくなってしまいそうになる。自動車が止る。「降りて見ませう」と s-ro がいわれた。

Urbo-domo の真近辺である。ここに malnova な hispana

domoがあるというのだ。大通りから中の小路え。左え曲ると、なるほど hispana だ。妙な屋台店がごろごろ並んでいる。そこで鰐皮細工、木細工、竹細工等の土産物を売っており、その裏では「おでん屋」とも酒屋ともつかぬ妙な所がある。二階建の古くさい家がその両側にならんでいて、そこの二階のベランダで hispano の青年が若い娘とギターをならす。白髯のうすぎたない老人が家の前の木ベンチにかけてさびしそうな顔をしている。土産物を買いたかったが mankas mono で二三枚絵はがきを買っただけ。小路をつききった所で s-ro と車が待っていた。それから又南え走る。

ロス市の Broadway をたてに走り、懐しい Sukiyaki のネオを見たり、此の前この辺に来たときの失敗などを思い出したりしながらこの街過ぎてゆくことに名残惜しさを感じた。自動車が右に曲って住宅街に入る。この街での老エスペランチストであり、UEA の名誉会員である ges-roj Parrish のところにゆこうといわれるのだ。静かな家の前に止る。ベルをおすと上品な太った70近いおばあさんがあらわれ、ges-roj Chomette と分ると、オーオと喜こばしげに声をあげられてから中に招じ入れられた。すぐに居間に出られた老紳士は無論、s-ro Parrish である。s-ro Chomette が私を紹介されると s-ro Parrish がにこにこして私に手をさしだされた。私は s-ro Parrish に Sidiĝu といわれてすぐに坐ってしまったが ges-roj の方は s-ino Parrish に挨拶するので大変である。s-ro Chomette が s-ino Parrish にひざまづき mano に kiso の挨拶をされる。この挨拶法は映画（それも十九世紀までの）でみたことがあるが、実際のものははじめてなので失礼だったけれども実に目をみはった。ges-roj Parrish も上品で bonhumora である。私のような青二才を遇するには丁重すぎると私自身に思われる位である。たとえば、私が日本から来たということを喜ばれ、奥に入って妙な安っぽい湯呑茶碗をもって来られてから「私の息子が沖縄戦線から帰って来ましてね」といいながらそれを私の前に差し出される。s-ro は此を日本の芸術かなんぞのように思っていられるのではな

いだろうかとちょっと考えたが「この表面にかかれているこの日本の文字はどういうことなのですか」と聞かれる。見ると「もののふのかがみは人の櫻かな――大石良雄」と草書体でかかれてある。早速説明にかかったが「大石良雄」の説明に多辯を要した。とにかくまがりなりにも説明したら s-ro Parrish はとても喜ばれた。s-ro Chomette も相づちをうたれて、日本の文字がすぐわかるなんて全くエスペラントのおかげですね」といわれる。日本の年寄りのように若いものとみればすぐ教えてやろうとか、説教してやろうとかいって悦に入っているのと違って、若い人からも知識を得ようとする、そういうこの御老人の態度が私には大変気に入った。暗緑色に暗んだ戸外の涼しい空気がもうこの室に流れこんでいるようだ。ges-roj Chomette に促されて家を出たが ges-roj Barrish は丁寧に玄関のポーチに送ってくれた。ザメンホフの存命当時からの古いエスペラントの斗士だったというこの人のさしだされた老いた手には未だ若い温い血潮が流れているように感ぜられた。

真暗な道をサーチライトが途方もなく遠くを照らすのだがそれに映し出されたものはすぐにこちらに流れよる道路と、真黒な街路樹だけである。郊外を走る自動車の速力は、むしろロス市街をかえりみる余裕を私に与えない。家の灯が一つ二つとみる間に工場街を抜け Willminton から再び Long Beach 市街に入る。給油所の駐車場に車をとめ、そこから Long Beach の中心街を三人で歩いた。とある小路の隅に棕櫚の木立があり、そこに小じんまりしたスペイン料理店がある。s-ino の指図で私達はそこに入った。若い海軍将校が一人居て此に店のスペイン娘が酒をそそいでいた。天井の赤いランプが晝間私が見ていた緑色の印象と妙に混和して私の心を浮かせた。s-ro が酒をすゝめたが、下戸であり、すぐに赤くなってしまう私は多くはのまなかった。s-ro はしかし大分お好きな様である。Mi bedaŭras ke mi ne povas trinki multe, sed generale japanoj tre ŝatas trinki sakeon kaj iuj el ili trinkas ĉ 2 litrojn da sakeo unu foje. といったら「私だってそれ位の

みますよ」といはれた。s-ro は船で日本までいくらかかるかと何ともきかれたがきっといつかは日本を訪れられるおつもりなのであろう。その時には大いに sakeo を飲んで頂きたいものだ。kevlino が運んできたスペイン料理は、外見玉子焼に似ているが外皮が米粉を固く処理したビスケットみたいなもので、その中に肉の野菜煮が入っている。ところが一口口に入れてみた所が、その辛さに驚天してしまった。s-ino はかなり平気に食べて居られたが、私はとても水なしでは食べられなかった。

夜の気分は北海道の初夏に似た爽やかな涼味がある。私達三人は尚も街を歩いた。ボーリングの競技上に案内して貰ったり、店でみやげ物を買うのに助けて頂いたりした。

時間は以外に早く過ぎていた。午后9時、船に着いてから、丁度2等機関士がいたのでエンジンルームを見せてあげたりしたが、jam la tempo adiaŭi al vi と s-ro がぎり出された時、実にさびしい気持がした。一日あって忽ち十年の知己のように、いや、いや、この見知らぬ土地ではおぢさんおばさんみたいにも思はれた人と――いよいよお別れするときなのだ。私は、又いつかやって来ませう――と挨拶したけれど、おそらく再びはお会いできないと思う。何か入りみだれた感情が私の頭の中で右往左往し、そして自分でも何をいってるのかわからないような言葉が口から出て――、あの星空の暗い街路の中にお二人の頭が消えてしまったように思う。妙に自動車の後のライトに照らされた自動車取付の verda stelo が印象に残っている――

夜中荷役をした。そうして予定時間より遅れて午前4時に港をはなれた。ロスの灯がだんだん後に流れてゆくのをみていると、又、ges-roj の顔が浮んで来た。私のために――80 哩も自動車を走らされて、疲れてぐっすりお休みだろう――など考えたりした。

防波堤の灯台も過ぎた。船の前途にはもう洋々たる太平洋があるのみである。そうして今更のように私は私が日本人で、日本という

故国に帰る身であることを海図に描かれた一本の線によって知った。アメリカ沿岸を走る事二ヶ月餘。そうして今胸の中に温く残る思い出はすべてあのエスペランチスト達の bonkoreco による贈物である。

Adiaŭ, Usono — そうつぶやきながら、又泛んできた f-ino Wolf, s-ro Kumamoto, ges-roj SCherer, ges-roj Chomette, ges-roj Conner それから ges-roj Parrish などのお顔の方に Dankon, Dankon をささげるのである。

(1953.2.2)

完

Ridindajo — Fablo —

Trad. de Noboru Hajakawa

Kiel Favoros la Avalokitesvaro en Asakura al Tiu Ĉi Komercisto?

Riĉega kaj pli ol sesdek jaraĝa komercisto loĝinta en Edo (pasinta nomo de japana ĉefurbo Tokio) kun la volo, ke li konstruu la sanktejo de Dio Inaro (vulpotipa dio de la greno), fervore preĝis al Avalokitesvaro en Asakura (parto de Edo), ke la sankta favore longevivigu sin pli ol sia tiama aĝo.

Ĝuste en la mateno, kiam lia sestaga regula preĝo finiĝis, li ie trovis monojn kiel multe centno senojn. La komercisto tre ĝojis pro tio, kaj, revenintе kejmen, li kunvenigis siajn familianojn kaj geservistojn. Do, li anoncis ilin.

"Mia trovo de monoj, kiom ajn malmulte, estas tute signifoplena kaj al la sankta dankebla, ĉar

ĉar mi scias la rakonto de fama budana pastro Ŝunjō-bō. La pastro, kiam li, malgraŭ sia maljuneco pli aĝa ol sesdek jara, piedire varbadis monoferojn el diversaj provincoj por konstrui grandegan statuon de Budao kaj ĝian templegon, kiel mi preĝis al Avalokitesvaron en Kijomizu (parto de Kioto, la malnovtempa ĉefurbo) sian longevivigon por sia ellaboro. Tiam, maton-maton li troris sur sia vojo. Do, li ege ĝojis kredante, ke la sankta longevivigu lin pli aĝan ol dudek jarajn. Kaj, fine li efektivigis sian ĵurpromeson. Laŭ la ekzemplo, mi kredas, ke tiu sendube estas al mi la orakolo ĝojinda."

Auskultante lin, ĉiuj krom hereda komizo kortuŝite flustris. La komizo nomita Kjūzō nur melankolie eklarmis. Do, kelkaj nekompreneble al li demandis.

"Ĝuste kiam vi ĝoju, kion vi sentas?"

La komizo juna respondis al ili plorvoĉe.

"Nur mi sentas la veron! Certe estis rezonebla diveni troritajn matojn je longevivigu. Tamen, la orakolo al mia mastro estas alisignifa. Tio signifas ke li subite mortu. Ĉar mi kredas, ke la centro senoj aludas la finiĝon de lia vivo."

Post la diro, li ploregante kuŝiĝis.

(Teksto: "La Verkaro de Ridindaj Fabloj en Budaismemo" kompilita de S-ro Ŝukō Hasumoto.)

60年のエスペラント

G. J. Degenkamp

朝比賀　昇訳

訳者まえがき

これは《Esperanto 60 jara: skizo pri la eroluo de la lingvo literatura》de G. J. Degenkamp 1947 (Libroserro F.L.E., Nederlando) 16×24cm 58p. の全訳です。本書については Akademiano Prof. Kawasaki が R.O. p.146, 1953 に述べておられますが、本文は 42p. でうしろに《La Neĝa Blovado》(de Puŝkin, tradukita de A. Grabowski) (8p.) と《Cezaro》の一部 (de Jeluŝiĉ, tradukita de Potkviĉ) (6p.) が附けてあります。約150名の Esperantistoj が記され、本文だけ訳しても 400字づめ原稿用紙 200枚位になります。面白い本なので訳して連載してみようと思います。

UEA の《ESPERANTO》誌 Nov'47 に Recenzo があるのでその一部を引用しておきましょう。

《----Li detaligas la stilajn apartaĵojn de la plej gravaj verkistoj, originalaj kaj tradukaj, kaj esploras la uzadon de diversaj vortoj kaj vortformoj sub iliaj plumoj. Atentigante pri la diferencoj inter la plej primitiva kaj la plej moderna formoj de la lingvo, li provizas al la leganto ekzemplojn de ambaŭ, represigante ĉe la fino de sia verko unue la konatan tradukon La Neĝa Blovado k Cezaro. Inter multaj eroluigaj faktoj menciitaj en la verko, oni citu la liberecan sintenon de Zamenhof mem rilate al la stilo de aliaj verkistoj, la insiston de Prof. Cart kaj aliaj samopiniantoj pri plena fideleco al la Fundamento kaj obemo al la decidoj de la oficialaj lingvoinstancoj, la aplikon de la principo pri neceso kaj sufiĉo, rekomendita de la Akademio en 1913, kaj la gramatikan influon de la naciaj lingvoj,------

(Alec Venture)》

はじめに

60年　エスペラントは既に存在して来ました。もしもエスペラントの創始者や、このコトバの初期における開拓者達が、60年のちになお、世界的に使われるコトバという彼等の空想が完全には実現されていないということを知ったとしたら、彼らは多分彼等の理想を現実化することについての希望を　幻滅を感じてあきらめてしまったでありましょう。

けれども、彼らは　世界を私たちとは違ったところでみていたのでした。いつの日にか世界は国際語問題を、彼等が解決した方法を　感謝とともに採用するだろうという希望によってうぬぼれていたのでした。彼らに感謝してやまない後輩である私たちは、すばらしいこの贈物を　世界が受け容れていない　ということを知っています。絶えまもなく　人類は　どのようにして　技術を　できるかぎり高めるか、どのようにして　生活を　もっと便利にするか、また特に　どうやって　力ネを　たくさん　もうけるか、といった問題で　頭を一杯にしております。これらの目的を達するために　人類は　いつも　新発明や完全化を考えだして、生活を一层混乱したものに　し続けています。しかし　もっともヤッカイな諸問題を解決するためのそうした努力のうち、国によってコトバが違うという毎日痛感させられる問題にも、また　すぐ採用できるそれに対する根本的解決法にも　人類は注意しておりません。　この事実は悲観すべきものでありましょうか？　いや、いや！というのは、それにもかかわらず　世界は　私たちを　もはや　ユートピアンとは観ておらず、私達の行動を重視している、ということを　経験しているからであります。私達の終局的目的をまだ達してはいませんが、一般の興味をよびさまし、この事業の重要さを意識させるなどの　注目すべき結果を　視ており、そして　既に60年も前に人類のために用意されていた贈りものを　私達の手から終局的に手渡すため、事業に忙しい　という時も　そう遠くないのであります。満足なしに　私たちは　過去を　ふりかえることはできません。また　ことに、希望と　正当な信頼　とをもって　将来を眺めることができるのであります。

たくさんのことを　エスペラントは　過ぎ去った60年の間に経験して来ました。いくらかの成功のすきには不振をも味わったのでした。理想をかかげた運動にたづさわる人類の期待を　裏切った　幾度かの重要な世界的事のおかげで、成長の時のあとには　何らかの後退の時が従いました。しかし　全体として見ますと　進歩の一線は、急速にではないとしても　休むことなく着実に　上昇しているのです。けれども、もう一つの地层の上にも　すなわち内部的にも　このコトバは　多くを体験して来ました。前には　しりごみしながらフラフラととりあつかわれた　このコトバは　ついに、エスペラントはほとんどあらゆる面で民族語と同じ価値を持っている　という事実に対する疑いは　もはや存在しないという　そんなに強力な内部的な力を得たのでありました。エスペラントは発展したのです。それは　だんだんと実際的な必要に適応するようになったのです。そして　まず第一に　それは　文学的使用に対して価値が高いことが示されたのでした。

エスペラントがその幼年期にどんなであったか、また今私たちが使っているもののよう

なるまでに エスペラントは 幼年期から どれ位発展したのであるかということを エスペランチスト界自体に示すべき時期が来たのであります。

これこそ この本の目的なのです。

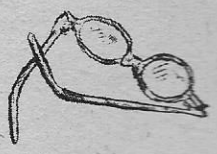
私たちは 次のことをよく心にとめておきたいものです。根本的に固定されている規則のおかげで 変化らしい変化が起らなかったので、初期のエスペラントは幸運だった というようなことではなく、エスペラントの精神に調和し その根本的規則を守っても採用できる、そういうものだけを 諸民族語から 採り入れながら、個有の力と血液とによって このコトバが どれほど発展して来たか ということを。

この本は 年代学の形で 厳史的概観を与えようとするものではありません。というのは それはとてもできないと思はれるからです。コトバというものは それを使う人たち、ことに文学者の手の中で 発展するものであります。けれども 私たちは コトバの発展が段階的に行われたと云うことはできません。一区保守的で あまり思いきったことをしない作家達の手中においてよりも 他の作家達の手中において コトバは より広いものになり より現代的なものになって 発展をとげて来たのです。

各章に分けた形のそれぞれで書かれている色々な事実や、作品、進歩のあとなどに触れながら、こうした発展に関する 何らかのスケッチを書くように努力しました。けれどもこれらの各章を はっきりと区分された各時期そのものだ というふうに考えないでいただきたい。コトバの発展の相というものは 次の新しい相が始まる手前で きりかえのためにストップするなどという具合には行かず、2相が まるで溶け合ったように、時にはほとんど平行して進むことさえも 多いのであります。

エスペラントを文学に応用した もっとも時間的にかけ離れた例として 2つの離訳をこの本の終りに採録して、私は エスペラントには 本当の変化というものは起っていない ということを証明しました。その2離訳は まだ非常に原始的だった頃の エスペラント第1年に A.グラボウスキイが訳した A.プーシキンの「吹雪」と、エスペラント自身がもつ あらゆる可能性を生かして もっとも現代的な感覚でエスペラントを使うすべを心得ている I.ロトゥクヴィチュによって訳された M.ユエルシィチユ作「シーザー」の1部分と であります。思いまどう手でなされた前者と、エスペラントが実現し得ないものがあるかどうかを 試みる実験ででもあるかのように縦横無盡の後者との間には ちらりと見ただけでも 大きな差があるのがわかります。けれども、その大きな差異にもかかわらず、現代のエスペランチスト達は 前者の試みを 後者の芸術的作品と同じようにたやすく読むことができます。ここに真の発展があるのであります！ 私たちが正しく語ることができる発展こそ それなのであります。

アムステルダム　　1947年5月25日



LETERO EL ĈEĤA KAMARADO

Havas certe neniun valoron, kiam gekursanoj, scianta nur kelkajn vortojn kaj Esp. esprimojn, do tute nove duonbakitaj esp-istoj, ŝatas korespondi kun la eksterlandanoj nur pro fieriĝi kaj fanfaroni, ke ili jam kapablas korespondi kun alilandanoj. Certe oni devas havi certajn lingvokonojn, oni devas scipovi gramatikon kaj lingvokonojn, oni devas scipovi gramatikon kaj vortfaradon, sen tio estus la tuta korespondado plene senutila, eĉ tempoperdo, almenaŭ por tiu eksterlandano. Do oni devas unue havi certajn preparojn kaj konojn. Kaj ĉiam nur peti la kursgvidanton, ke li korektu aŭ tute traduku la forsenditajn aŭ ricevitajn poŝtaĵojn, ne estas ja eble kaj havos neniun valoron, ĉar ne li, sed tiu kursano ja volas korespondi. Kaj por la kursgvidanto estas tia laborego ege enuiga kaj laciga kaj neniu rajtas ja rabi lin lian valoran tempon. Kaj por ke nenion oni perdis, oni devas atendi iuman tempon, ĝis la niaj konoj de la lingvogramatiko estas perfektaj, tiam oni estas kapablaj korespondi mem, sen helpo de alia persono. Nur tiam la interkorespondado havas sian ĝustan kaj veran valoron kaj plenumi ĉiujn taskojn pro kiujn ĝi estis de nia Majstro L. L. Zamenhof kreita. Pro tio ankaŭ pasio de la kursanoj devas nepre post certa tempo malvarmiĝi, ĉar ili neniam komprenos aŭ komprenis kion oni devas gajni danke'al nia Esp-o. Nur homo, kiu senhelpe de alia persono mem korespon-

das, povas prijuĝi la signifon kaj valoron de la interhelpa lingvo kaj povas ĝin pro tio ankaŭ ŝati. Mi diras ĉiam, ke veraj esp-istoj, apartenas al certa interesa homklaso, nome al homoj, al kiuj ne plu sufiĉas tio, kio sufiĉas plene al homoj aliaj, simplaj, do nur manĝado, trinkado, dormo kaj certaj amuzoj. Esp-istoj celas kaj volas certe primulte de la vivo, ili estas scivolaj, kiel ekzemple: kiajn vivkondiĉojn kaj cirkonstancojn ili havas, ĉu ili vere opinias la mond pacon efektivigeblan k.t.p. Esp-istoj vivas kaj vere volas ankaŭ vivi, sed ne nur tio, li ankaŭ celas lasi vivi la aliulojn, pace kaj ame, ili volas sian vivon pasigi senfalse, ekonomie. Ili serĉas amon inter homoj kaj celas doni al la homaro la perditan kredon al Dio kaj Naturo.

Parton de la letero lastatempe sendita de Ĉeĥoslovaka kamarado Půžička Václav mi sendas ĉi kune al la redaktoro. Li estas mia nur dumjara karespondanto, sed, ŝajnas al mi, ke lia opinio estas tre interesa kaj justa. Precipe pri la linioj traktantaj pri komencanto kaj korespondado. Ĉiu Esp-propagandanto aŭ kursgvidanto trovus lin trafa.

—(Acuŝi Hoŝida)—

エスペラント通信教育開講　小樽市汐見台町－小樽海員学校内 エスペラント研究会

- 希望によりいつでも受講できます。
- 通信による説明と添削指導を行います。
- エスペラント学習に要する費用は次の通り　教材費・通信費 500円　エス和辞典 180円

Mozart kaj Beethoven について

花園凡太郎

R.Oの五月号にエスペラント入門講座として Mazart kaj Beethoven が載せられて、三宅史平先生の懇切な解説と流麗な訳文がついているのを読んで、このエスペラント訳文とドイツ文とを対照して見たいと思つた。

もとより私はドイツ語を a b c ぐらいしか知らないし、エスペラントの方もまだ komencanto に過ぎないのだから、メクラ蛇におぢずのソシリを免れがたいけれども、私にとつての一つの勉強として書いてみようと試みたに過ぎない。諸君からいろいろの御叱正が得られるならば幸甚。

Mozart kaj Beethoven

Estis en la jaro 1787, kiam la juna Beethoven vojaĝis de sia naskurbo Bonn al Vieno. La 16-jara junulo volis ricevi lecionon de Mozart.

Kiam Beethoven vizitis la mondfaman muzikiston por la unua fojo, li ion ludis al li. Mozarto aŭskultis kaj laŭdis la ludon, sed nur per malvarmaj vortoj. Li pensis: ĉi tiu juna viro ludas ion kion li diligente lernis en sia hejmo

(独文) Mozart und Beethoven

Es war im Jahre 1787, da reiste der junge Beethoven von seiner Vaterstadt Bonn, in der er wohnte, nach Wien.

Der Jüngling, der 16 Jahrte alt war, wollte bei Mozart, dem großen Meister der Töne, dessen Name schon weltberühmt war, Unterricht nehmen.

Als Beethoven ihm das erstemal besuchte, spielte er ihm etwas vor. Mozart hörte zu und lobte sein Spiel, aber nur mit kühlen Worten. Er dachte: „Der junge Mann spielt da etwas, was er zu Hause fleißig eingeübt hat."

(G) Es war im Jahre 1787, im = indem
Estis en la jaro 1787,

ドイツ文では前置詞の in は必らずろ格をとるのに、Esp. では前置詞の en に格の支配が無く、年や時、気候などの場合には英語やドイツ語のように文法上の主格 it や es を必要としないことは簡略で甚だよろしい。

kiam ..... = da .....「…もたその時」

la juna Beethoven = der junge Beethoven

ドイツ語でも固有名詞に定冠詞をつけないが定冠詞 + 形容詞 + 固有名詞となると意味が限定される。

naskurbo = die Vaterstadt

de sia naskurb Bonn al Vieno = von seiner Vaterstadt Bonn nach Wien.

in der er wohnte 「そこにかれが住んでいた」は Esp. では省かれている。

vojaĝis = reiste (reisen の過去形) [3人称単数の]

La 16-jara junulo = Der Jüngling, der 16 Jahre alt war 十六才の青年。der Jüngling は12.3才から20才までの若者青年のことだと岩波独和辞典には説明してある。

volis = wollte (wollen の過去, 欲した, 望んだ, 願った)

(以下, 次号)

Mia Vivo kaj Penso Lastatempa

Hoŝida-Acuŝi

昨年末、苫小牧に出来た小さなうたの好きな連中のグループに足をふみ入れて以来、現在迄、そのあつまり——(今はひまわり合唱団という一寸気のきいた名前をもっていますが)——の仕事をさせられて来ました。ひまわり——日に向ってのびていく——明るいものを求めて——という気持からこんな名がついたのですが、今団員30名程、週一回集って練習しています。僕の仕事は工場と、この合唱団とでほゞ一杯という始末、まあ僕の近況です。ところで僕が通信している *korespondanto* にこのことを書いてやったら、ドイツの青年 Karl-Heinz 君から、ひまわり合唱団への *Saluto* をかいてきましたので皆に紹介し、近く出る団報にのせることにしました。「返事をかいてきたら訳して送ってやる」といっておいたから、Esp.を通しての集団文通になるかも知れません。外国の音楽愛好者とうまく結びつけば——と思っています。

又、外にいくつかの友からの手紙は訳して組合新聞其他にのせようかとも思っています。いろいろ面白い文もあるので。ビキニの水爆だ、再軍備だ、アメリカのインドネシヤ介入だ(?)云々。我々の知る外国の人は皆平和をのぞんでいるのに何故こんなふうにいやなことばかり起る？ と時々考えさせられます。しかし、*Majstro Zamenhof* もいったように、各民族間の障壁、互に話し合えず理解し合えず、その国際関係たるものが一部の政治家たちによって行われているのも一つの因子ではないでしょうか。今こそ *Zamenhof* のいった如く我々が Esp. によってそれを打ち破っていくべき時かと思います。どんどん通信して多くの人達に、世界の人々の平和へののぞみには障壁がないということを知らせたいと思います。

中共貿易協約、ソ連・中共よりの帰国も政府の手ではだめだったのに、民間の力によって行われて来たではありませんか。*Esp-istoj* も、今やっている「世界の子供」のような大計画、又その外何でも、世界諸国民の理解を深め、少しでも平和への道をひらめる仕事が出来ないはずはないと思います——とか何とか考える内、夜もふけて来ました。皆さんお元気で。おやすみなさい。 (1954.5.10.夜)

Saluto el Suda Hokkaido

Acuŝi Hoŝida

Unue, mian bondeziron al ĉiuj samideanoj en Hokkaido! Due, mi petas viajn grandanimajn pardonojn pri mia tre longtempa silentado! Trie, mi ĝojas, ke mi povas nun sciigi al vi, ke mi laboras sane en la fabriko ĉiutage, sed, kvare

mi malĝojus kaj bedaŭras kaj eĉ devus honti, ke mi povis neniom labori por nia kara lingvo Esperanto.

Kiel vi fartas, karaj gesamideanoj? S-ro H. Kodama en Sapporo kaj aliaj ges-anoj en Juni. S-ino Fumiko Kiŝimoto estas sana kaj ofte parolas pri vi kaj gajaj tagoj en Juni.

Feliĉon al noraj geedzoj!! Mi dediĉas ĉi saluton al Ges-roj Jamamoto, Takahaŝi en Otaru, kaj aliaj noraj de mi ne konataj-----.

S-ro Sugaŭara en Azuma: koran dankon por via longastigo antaŭfoja, kiel vi fartas? Ni baldaŭ revidu! Ĉu ne?

Pardonon por mia longa silento, S-ro Hirata en Muroran! Mi deziras iam viziti vian urbon, sed bedaŭrinde, ankoraŭ ne realiĝis.

Kiel iras via Esp.-lernado, juna samideano Ken-iĉi Itoo, en Ŝimizu Mezlernejo en Muroran? Mi ofte prizorgas pri vi, ĉar vi lastatempe, neniom sendas leteron. Kresku kiel juna herbo!

Do, mi metu plumon por hodiaŭ. Karaj gesamideanoj, premu manojn reciproke, varme kaj forte, por plifirma antaŭ marŝo kun nia komuna ligito „LEONTODO"! Jam la floroj LEONTODO floras bele eĉ ĉi tie, kie malfrurenas printempo. Nia organo „LEONTODO" ja devas flori bele, per nia komuna klopodo anoncante printempon al ĉiu dormanto.

原稿募集

LEONTODO 第10号の原稿を募集致します。

要領　なるべく原稿用紙を使用の事、横書にして下さい。
内容は別に制限せず。しかしなるべく時局を反映せるもの。

締切　7月5日
発行　7月中旬

内容・編集等についてはどしどし御意見を
およせ下さい。表紙に適当なものがありま
したら御紹介下さい。LEONTODO 編集部

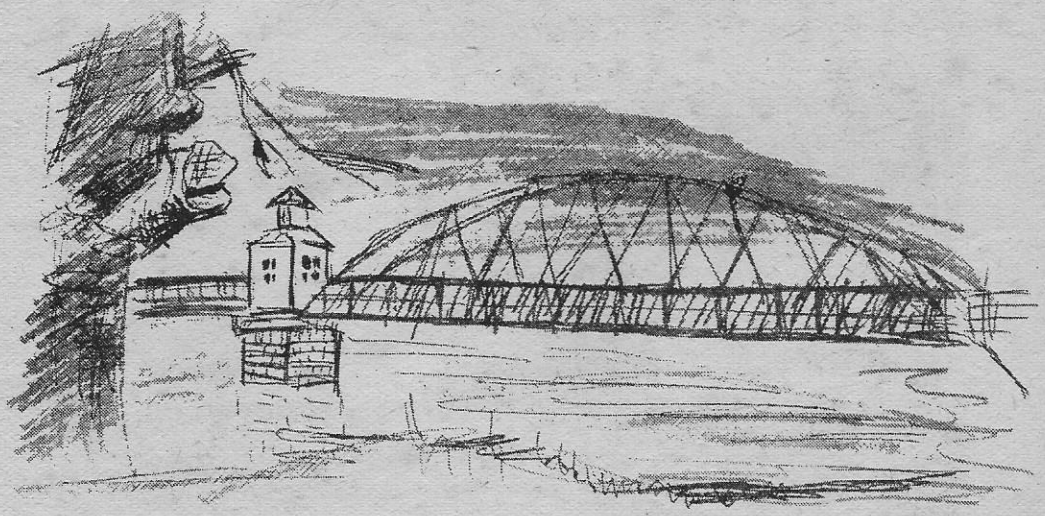
Plej Korajn Bondezirojn al la Du Junaj Paroj

Ni havas la hontentecon sciigi al vi, ke kvar junaj geanoj jam faris du bonajn parojn.

La unua estis la geedziĝo de F-ino Yasu-ko Kajama kun S-ro Tatuzi Takahaŝi, en la 25-a de Januaro. Kaj, la dua estis de F-ino Sizu-ko Tutida kun S-ro Syoziro Yamamoto, okazinta en la 26-a de Marto.

Ambaŭ la novedzoj estis por nia movado tute fidindaj, kaj ankaŭ la du novedzinoj. Laŭ la edziĝo, ili necese fortigos nian movadon per laboro kaj pasio.

Tute feliĉan novvivadon por ĉiu de la du geedzaj paroj!



エスペラント講習会開く

小樽エスペラント会では今年もエスペラント初等講習をはじめた。5月12日から毎週水曜日市立図書館にて向う3ケ月間。参加者下記の如し。

		住所	勤先(又は学校・学年)	Tel.
志村嘉男	20才	市内厩町69	市役所	
浜田義広	19	市内石山町60		
佐々木順一	16	市内東雲町22	緑陵高校	
伊藤繁雄	28	末広町71	旭ヶ丘中学(教員)	
長谷昌幸	23	最上町9	旭ヶ丘中学(〃〃)	
桑原敏郎	17	最上町10	千秋高校	
斉藤邦夫		汐見台町1	海員学校	
土山忠		石山町9	千秋高校	
菅谷博	20	緑町商大二寮	小樽商大2年	
五十嵐すみ子	16	緑町3の4	旭ヶ丘中学	
〃 則子	14	〃 〃	〃	
宝福敏彦	19	市内入舟町5の14	北大2年(教養)	
伊藤成人	16	市内第二埠頭	汐陵高校	
富沢幸枝		奥沢町2の32		
野口源太郎		花園町西4の59		
○横山良勝	20	梅ヶ枝町44	商工信用組合	
久慈陽子	21	真栄町101		
多田弘	16	花園町西3の5		
佐藤敏雄	15	小樽海員学校内		
池田鶴正	16	小樽海員学校内		
工藤信克	17	小樽海員学校内		
里谷捷治	13	高島町71	高島小学校六年	
○滝和美	19	小樽商大二寮	小樽商大二年	
渡辺良作				
五十嵐孝子		石山町37		

小樽エスペラント協会

1954年1月現在，但し一部住所変更判明のものは訂正した

山賀　勇	49	花園町東3の11	眼科医院開業	Tel. 1,116
早川　昇	46	緑町2の2	海員学校講師	757
高橋達治	28	奥沢町2の3	海員学校教官	4,790
高橋やす子	27	〃　〃		
中沢天眼	60	花園町東4の22	観相	
池島与三吉	48	緑町5の28	拓銀オ二支店次長	2,850
江口音吉	45	奥沢町4の22	薬局	3,827
山本昭二郎	27	住ノ江町9の8		
山本静子	27	〃	長橋中学校教官	
土田虎幸	30	清水町34		
前田幸一	25	花園町西2	海運局人事課	5,010
根坂圭治	48	入舟町4の14		
斉藤　翠	35	花園町東2の12	汐陵高校教官	754
鷲田みち子	22	(朝里)新光町	朝里中学校教官	3,229
長岡　弘	22	量徳町25 井華礦業	会社員	
星　巌	27	稲穂町西3の18	森川漁網会社	1,171
河野チエ子	24	汐見台町9	小樽測候所	432
小黒一弘	26	稲穂町東8の16		
高村光東	22	花園町東3の9	小樽商大学生	
元谷　清	18	朝里新光町90		
佐藤　肇	22	南赤岩町25		
○佐々木俊一	17	河東郡上士幌町黒石平	電源開発株式会社糠平建設所電気課	
佐藤忠秀	17	長橋町22		

（客員）

岡崎茂治	59	入舟町9の2	琴似運輸社長	6,486
三浦幸蔵	41	東京都港区芝虎ノ門17	拓銀虎ノ門支店次長	
森本三郎	44	最上町10	道新小樽支社	3,283
矢田貝紀雄	22	札幌市北6西10		
滝　一郎	27	美唄市下4の4	三井美唄砿業所	

下山善吉	43	定山渓中学校	
坂口豊治	66	古平町浜町	
高橋要一	42	札幌市南大通東八	荷札会社

由仁エスペラント会

1953年10月1日現在
但し試習を終え現ほしていても
継続勉学を中止している者は除く

新田為男	36	夕張郡由仁町字三川	由仁町議会事務局
片山暁雄	29	〃	木工場
大村誠	29	〃	由仁町役場吏員
桑島正男	18	〃	学生
田中郁夫	21	〃	東千歳農協職員
坂井敏雄	28	〃	三川駅鉄道員
桑島隆	29	〃	東千歳農協職員
浜谷節夫	32	〃	商業
村上隆	23	〃	信用金庫職員
宮井康夫	27	〃 字由仁	商業
菅ハルエ	33	〃	
新谷英子	30	〃	小学校教官
石塚秀子	26	〃	
平塚恭子	24	〃	
外山雅子	19	〃	由仁町役場職員
泉谷昭典	19	字川端	由仁町議会事務局
成松富子	19	字熊本	由仁町役場職員
伊藤秀隆	37	字古山	〃
井端秀雄	25	〃 字岩内	小学校教官
武田二郎		岩見沢市2条東2丁目3	
藤井沢司		〃 〃 4条西15丁目	岩見沢保健所職員
岡本義雄		空知郡三笠町幾春別	小学校長
工藤尚		〃 奔別38	
田辺至		浦河郡浦河町浦河高等学校内	高等学校教官
川合トキ子	26	札幌市北23条西5 間所方	
岸本富美子	34	苫小牧市緑町88 日通社宅	
白井和子	22	室蘭市輪西駅前 丸美旅館方	

小樽エスペラント会1953年度収支

(29. 1. 51)

(収入)		(支出)	
前年度繰越金	13,274円	学会会費納済金	3,700円
銀行利子	639	LEONTODO助成金	3,600
会費	14,660	通信費	274
寄附	1,580	翌年繰越金	16,579
	30,153		30,153

(前年度繰越金内訳)		(会費内訳)		(翌年繰越金内訳)		(寄附)	
預金	12,274円	(100×6+70×6)×2	=2040円	預金	12939円	池島氏	500円
現金	1,000	100×12×4	=4800	現金	3,640	土田虎祇	360
		100×6×1	=600			土田静祇	360
		70×12×8	=6720			鷲田氏	360
		500×1	=500				
	13,274		14,660		16,579		1,580

Postskribo

LEONTODO 第9号を漸く諸兄におくる。昨年12月に第8号を出して以来、実に半年の空白を作つた。意識的にそうしたわけではなく、ずるずるべつたりであつた。4月中旬に出す筈であつたのが2ケ月も遅れたのは、理由はともあれ眞に読者諸兄に申訳ない。今後は発行日は厳守したい。原稿が一定量に達するまで待つということをせず、頁数に幅をもたせたい。LEONTODO を半年も休刊していたのでいろいろの文句をきかされた。この苦情はいわば amo, kareco のあらわれであるから、内心取り入り、且つ責任と感激をかんじた。今后はあとがきにべんかいなど書かないですむ様にしたい。やがて日本大会、そして北海道大会がくる。それまで第10号、11号を出したい。

内容は制限していないのだが、飜訳の様なのが多い。むしろ創作をたくさんほしい。エスペラントで探偵小説などはどうであろう。Muccuri-Umon のエスペラント訳は!?

次号はなるべく早く出す予定。ĝis revido!

Y-S.

LEONTODO N-ro 9

発行日　1954年6月20日

印刷・編集　山本昭二郎　小樽市住ノ江町九ノ八

発行人　小樽エスペラント協会　北海道小樽市花園町東3-11　山猿眼科医院内

会費　40 jenojn